

シャマタデーヴァの伝える阿含資料補遺

— 界品 —

本 庄 良 文

チベット訳のみで伝えられる、シャマタデーヴァ俱舎論註（大谷目録5595，東北目録4094）の研究は、櫻部建によってその端緒が開かれた。私はそれを継承するかたちで、1978年頃から凡そ次のような過程で研究を進めてきた。

- (i) 第二章根品、第五章随眠品、第七章智品、第八章定品、第九章破我品の資料比定および抄訳。
- (ii) 『俱舎論所依阿含全表Ⅰ』の出版（北京・ナルタン・デルゲ・チョネ版の資料対比、シャマタデーヴァの引く資料の比定、法幢、佐伯旭雅、西義雄、ド・ラ・ヴァレ・プサンの比定箇所、称友疏の箇所の対比）。
- (iii) 長・中・相応・増一阿含、律、論など、資料別の分析。
- (iv) 第一章界品、第六章賢聖品、第四章業品、第三章世品のほぼ全訳。

この作業は、『教育諸学研究論文集』（神戸女子大学教育学科研究会vol.10，1996）の稿をもって一応の終結を見た。このことによって全巻を、資料比定あるいは部分訳によって紹介しおえたことになる。そこで、あらためて抄訳に終った諸品の全訳を目指し、次のような拙稿を発表した。

- (1) 「シャマタデーヴァの伝える阿含資料補遺—智品(上)—」『神戸女子大学文学部紀要』第30巻 1997, pp.91-103.
- (2) 「シャマタデーヴァの伝える阿含資料補遺—智品(下)—」『教育諸学研究論文集』第11巻 1997, pp.21-29.
- (3) 「シャマタデーヴァの伝える阿含資料補遺—破我品(上)—」『神戸女子大学文学部紀要』第31巻 1998, pp.91-104.
- (4) 「シャマタデーヴァの伝える阿含資料補遺—破我品(下)—」『教育諸

学研究論文集』第12巻1998, pp.75-84.

界品を紹介した以下の三つの論文では、紙数等の関係で若干の資料の和訳ができていなかったのもので、今回補足させて頂くことにした。

(I) 「阿含と俱舍論-界品(1)-」『密教学』20/21, 1985, pp.(27)-(40).

(II) 「阿含と俱舍論-界品(2)-」『南都佛教』54, 1985, pp.(1)-(17).

(III) 「阿含と俱舍論-界品(3)-」『佛教研究』20, 1991, pp.107-123.

未訳の部分に拙著(iv)の番号と主題を以て示せば、[21] (略説), [25] (八萬法蘊), [27] (十遍処), [28] (八勝処), [29] (四無色処), [30] (五解脱処), [32] (多界經)となる。そのうち、[32]『多界經』は、称友疏所引梵本(部分)、中部・中阿含、別行のカンギュル所収チベット訳、『法蘊論』『多界品』などに対応資料があり、『俱舍論』は勿論、種々の論書に引用・言及されることも多く、本来ならばより多角的で厳密な取り扱いが要請されるのであるが、ひとまずウパーイカー所伝のものを紹介するに留めた。

各項目ごとに、4桁の資料番号(最初の「1」は第一章、界品の意)、プラダシ本(AKBh)頁行、北京・デルゲ版テンギュル該当箇所(Tu, Ju)、櫻部建『俱舍論の研究』(法蔵館)対応頁、訳、註、対応資料を示す。またシャマタデーヴァの言葉には下線を引き、俱舍本論引用部はゴシック体とした。

[1021] AKBh14, 12; Tu23b1; Ju21a3; 櫻部p.176

【和訳】「〔教えを受ける有情の〕願望も三種である」という〔本文〕につき、簡略な〔教え〕に対する願望の実例は：

舍衛國にゆかりがある。

さて、ある比丘が密かなる禪思(pratisamṭlayana)より覚めて、世尊の下に近づいた。近づいて、世尊の両足に頂礼し、一隅に坐した。一隅に坐して、その比丘は、世尊に次のように申し上げた。

——世尊は私に、見事に、簡略化された〔法〕、そのような法をお説き下さいますように。そうすれば私は、世尊の下で簡略な法を聞き、独り(ekākin)

遠離し(vivikta)、努力し(apramatta)^{注1}、熱心に(ātāpin)^{注2}、精神を傾注して(prahitātman)時を過すであります。独り遠離して、努力し、熱心に、精神を傾注して時を過し、そのために〔こそ〕善男子(kula-putra)が髪と髭とを剃り落し、身に袈裟を着け、信を以て、正しく家より家なき状態に出立する〔ところの、その、〕無上の梵行を行じ、現法(現世)に(dṛṣṭa eva dharme)自ら通慧を直証し、智慧(明)を具足して、「我が生は尽きた。梵行は行ぜられた。なすべきはなし終えた。この生存より他〔の生存〕を知ることはない」と〔覚るであるような、そのような教えを〕世尊は私にお説き下さいますように。

その比丘がこのように申し上げると、〔世尊は〕述べられた。

——比丘よ、みごと、みごと。比丘よ、〔汝が〕そのように言うのはみごと、みごと。〔汝は〕「世尊は私に、見事に、簡略化された〔法〕、そのような法をお説き下さいますように。(24a)そうすれば私は、世尊の下で簡略な法を聞き、独り遠離し、努力し^{注1}、熱心に、精神を傾注して時を過すであります。独り遠離して、努力し、熱心に、精神を傾注して時を過し、そのために〔こそ〕善男子が髪と髭とを剃り落し、身に袈裟を着け、信を以て、正しく家より家なき状態に出立する〔ところの、その、〕無上の梵行を行じ、現法に自ら通慧を直証し、智慧(明)を具足して、「我が生は尽きた。梵行は行ぜられた。なすべきはなし終えた。この生存より他〔の生存〕を知ることはない」〔と覚るであろうような、そのような教えを世尊は私にお説き下さいますように〕」と言うのか。

——大徳よ、その通りであります。

——比丘よ、それではよく聴き、心を向けよ。説くとしよう。比丘よ、汝ならざる法、それを汝は捨て去るべきである。その対象を捨て去ったなら、長期に亘る利、益、楽の基となろう(arthāya hitāya sukhāya)。

〔比丘は〕答えた。

——世尊よ、解りました。善逝よ、解りました。

〔世尊は〕説かれた。

——比丘よ、汝は、私が簡略に、〔詳しく〕分析することなしに説いたことをどのように理解したのか。

〔比丘は〕答えた。

——大徳よ、「色〔蘊〕は我ではない。その法を捨て去ったなら、長期に亘る利、益、楽の基となろう。受、想、行、識〔蘊〕は我ではない。この法を捨て去ったなら、長期に亘る利、益、楽の基となろう」と、大徳よ、私は、世尊が、簡略に、〔詳しく〕分析することなしにお説きになったことの意味内容を、このように敷衍して理解いたしました。

——比丘よ、みごと、みごと。私が簡略に、〔詳しく〕分析することなしに説いたことの意味内容を(24b)〔汝が〕理解したのはみごとである。それはなぜか。比丘よ、色〔蘊〕は自我ではなく、その法を汝は捨て去るべきであり、その法を汝が捨て去ったなら、長期に亘る利、益、楽の基となろう〔からだ〕。受、想、行、識〔蘊〕は自我ではなく、その法を汝は捨て去るべきであり、その法を汝が捨て去ったなら、長期に亘る利、益、楽の基となろう〔からだ〕。

そこでその比丘は、世尊の説を喜び、有り難く思っ、世尊の両足に頂礼し、世尊の下より退去した。

次いで、その比丘について世尊は、「簡略なこの教誡によって教誡された〔あの比丘〕は、独り遠離して、努力し、熱心に、精神を傾注するであろう」と予言された。〔いっぽうその比丘は、〕独り遠離して、努力し、熱心に、精神を傾注して時を過し、そのためにこそ善男子が髪と髭とを剃り落し、袈裟を着け、信を以て、正しく家より家なき状態に出立する〔ところの〕、〔その〕無上の梵行を行じ、現法に自ら通慧を直証し、〔三〕明を具足して、「わが生は尽きた。梵行は行ぜられた。なすべきはなし終えた。この生存より他〔の生存〕を知ることはない」という智を有し、心解脱した阿羅漢となった。

これと同じ意味のことが〔五〕蘊品の〔第〕三摂頌のあれこれの経〔において〕以上のように説かれる。〔その摂頌には、〕

- (1) 隨順(rjes-su-mthun)と、(2) 数と、
- (3) 流れに結びつくこと(rgyun-tu-sbyor)と、(4) 老と、
- (5) 遍く結びつくことと、(6) カルパと、(7) 温かさと、
- (8) 心解脱と、(9) (10) 二經において勝者の息子である

とある。(25 a)

以下には、簡略な説への願望の、さらに別の実例がある。

世尊は、ヴリジ村^{注7}において(?)、侍者なる同志、村長のヴリジプトラ(Vrjiputra)と共に滞在しておられた。さて、同志ヴリジプトラは、世尊の下に近づいた。近づいて世尊の両足に頂礼し、一隅に坐した。一隅に坐して、同志ヴリジプトラは世尊に次のように言った。

——大徳よ、〔二〕百五十の学処が、半月ごとに誦される別解脱経(prātimokṣa-sūtra)において説かれています。善男子たる私は、充分意欲的^{注9}に、学において努めて学さねばなりません。それについて、私はこの学において学する意欲が湧きません。

〔世尊は〕説かれた。

——同志ヴリジプトラよ、汝は随時に三学を学するがよい。

〔ヴリジプトラは〕申し上げた。

——世尊よ、それ〔なら〕私にも意欲が湧いてまいります。善逝よ、〔私にも〕意欲が湧いてまいります。

——同志ヴリジプトラよ、それなら汝は随時に増上戒学を学べ。増上心学、増上慧学を学べ。ヴリジプトラよ、汝が随時に増上戒学を学び、増上心〔学〕、増上慧学を学ぶならば、遠くない将来に、漏を尽し、漏なくして心解脱し、慧解脱し、現法に自ら通慧を直証し、〔三〕明を完成し、「我が生は尽きた。なすべきはなし終えた。義務は果たした。この生存より別〔の生存〕を知ることはない」と〔覚る〕であろう。

かくして同志ヴリジプトラは、世尊の説を喜び、(25b)有難く思っ、世尊の両足に頂礼し、世尊の下より退去した。同志ヴリジプトラのために世尊はこの教誡によって教誡されて、「〔かれは〕独り遠離して、努力し、熱心に、精神を傾注するであろう」と予言された。〔予言の通り、〕独り遠離し、不放逸に努力を重ね、精神を傾注し、ないし、先の如く、智を有し、同志ヴリジプトラは心解脱した。

【訳註】(1) tshad-med-pa!=*apramita? (2) gdung-ba-med-pa!

(3) 予言の部分は漢訳に欠ける。(4) āyusmatの語が挿入されているが削除して読む。(5) この摂偈は雑阿含経巻第二の第15-24経を含む摂頌「使増諸數、

非我非彼、結繫動揺、劫波所問、亦羅喉羅、所問二經」(大2, 5b)に当ると見られる。漢訳では最初の8経において「略説」が主題とされている。(6)第一の経題rjes-su-mthunは、パーリ対応経(SN 22, 35)にanusetiとあり、雑阿含に「使」の語があるところからしてanusāyaの類語を写したものかと思われる。第二の経題はパーリ対応経にsaṃkhaṃ gacchatiとあるのに関係があらう。第五の経題は雑阿含の「結所繫」と対応しよう。第六のrtog(*kalpa, kalpanā)は漢訳「劫波」に当るであらう。第八の経題「心解脱」は漢訳第21, 22あたりの経文中にも見える。最後の二経のrgyal-ba-nyid-las-skyes-paはji-nātmajaと還元でき、Rāhulaに比定できる。『佛教研究』第15号, 1985所収拙稿「シャマタデーヴァの伝える中・相応阿含」p.72f参照。(7) Vṛji; Pāli: Vajji; 漢訳「跋耆」。(8)? rgyal-ba-'phel-ba-gang. (9)? legs-su-'dod-par. (10)? de-la. (11)佛が弟子に「同志(āyusmat)」と呼び掛けるのは異例である。あるいはテキストに混乱があるか。

【対応資料】(1)雑阿含1, 17(大2, 3b-c). (2)雑阿含29, 829(大2, 212c). 山口益『世親の成業論』法蔵館 p.231参照。

[1025] AKBh17, 19/Tu27a5/Ju24b3/櫻部p.186.

【和訳】八萬法蘊はどのように〔経に〕説かれているのであろうか。〔中阿含〕ウダーナ品の第一摂偈の第三経に説く通りである。

同志アーナンダが言う〔とせよ〕。「同志たちよ、私は八萬有余の法蘊を世尊の下で聞き、二〔法蘊〕を比丘たちより〔聞いた^{注3}〕。私は〔経の〕片句〔のみ〕を受持した記憶はない。逆に、一挙に〔すべてを^{注4}〕聞くのである。世尊に問い〔返し〕て受持した記憶もない。逆に、一度で聞き取るのである。＜その時もそうであった＞〔と〕このように心によって法は捉えられるべきである。いかなる法を受持し、〔いかなる法の〕理解を得るにしても、＜〔これは〕他人が捉えることができるようにするためだ＞と考えたことはない。逆に、〔あくまで〕自らを律するため、〔自らの〕寂靜のため、自らの涅槃のためを思つてのことである。〔私は〕心が高揚したり〔逆に〕怯んだりする根拠をも知らない。〔自分の〕梵行の方が他者〔のそれ〕より勝っていることの根拠がある、

とする心を〔自〕覚したことはないし、〔そのような心を〕生じたこともない〔と〕。もし同志アーナンダがこのように言うとするれば、〔それは〕同志アーナンダにとっての驚嘆すべきこと(未曾有法)である。

【訳註】(1)中阿含の組織については拙稿「シャマタデーヴァの伝える中・相応阿含」『佛教研究』15, 1985, pp. 63-80参照。(2)経文は全体に理解しづらい箇所が多い。(3)野沢静證「清弁の声聞批判——インドにおける大乘仏説論——」『函館大谷女子短期大学紀要』5, 1973, p. 205; 拙稿「『釋軌論』第四章——世親の大乘仏説論(上)——」『神戸女子大学文学部紀要』23, 1, 1990, p. 61; 拙稿「阿毘達磨佛説論と大乘佛説論」『印度學佛教學研究』38-1, 1989, pp. (59)-(64)参照。(4) gzhan-du-na=anyatra. F. Edgerton, BHSD参照。

【対応資料】中阿含 8, 33(大1, 473a25-b8)。

[1027] AKBh18, 2/Tu27b4/Ju25a2/櫻部 p. 187.

【和訳】「十遍処のうち」とは。

舍衛國にゆかりがある。

比丘たちよ、遍処には十がある。十とは何何か。(1)ある者たちは「ことごとくが地だ」と上に、下に、横に、不二にして無量なるを想う。(2)ある者たちは「ことごとくが水、(3)火、(4)風、(5)青、(6)黄、(7)赤、(8)白、(9)空無辺処、(10)識無辺処だ」と、上に、下に、横に、不二にして無量なるを想う。

【対応資料】『集異門足論』19(大26, 447a-b); Valentina Stache-Rosen ed. Saṅgītisūtra, p. 203. Cf. [8039] ad AKBh457, 14.

[1028] AKBh18, 3/Tu27b7/Ju25a4/櫻部 p. 188.

【和訳】「〔八〕勝^{註1}処もまた同様である」とは。

舍衛國にゆかりがある。

比丘たちよ、勝処には八つがある。どのような八つか。

(1)内に色の想いを有する者が、外に少量の、美・醜なる色を見る。それらの色に打ち克って知り、それらの色に打ち克って見、そのような想いもある。

これが(28a)第一の勝処である。

(2)内に色の想いを有する者が、外に多量の、美・醜なる色を見る。それらの色に打ち克って知り、それらの色に打ち克って見、そのような想いもある。これが第二の勝処である。

(3)内に無色の想いを有する者が、外に少量の、美・醜なる色を見る。それらの色に打ち克って知り、〔それらの色に〕打ち克って見、そのような想いもある。これが第三の勝処である。

(4)内に無色の想いを有する者が、外に多量の、美・醜なる色を見る。それらの色に打ち克って知り、〔それらの色に〕打ち克って見、そのような想いもある。これが第四の勝処である。

(5)内に無色の想いを有する者が、外に、青く、青い色を有し、青く見え、青く輝く色を見る。たとえばウマカーの花、あるいは、ペナレス産の染め抜かれた衣が、青く、青い色を有し、青く見え、青く輝くのを〔見る〕ように、内に無色の想いを有する者が、外に、青く、青い色を有し、青く見え、青く輝く色を見る。これが第五の勝処である。

(6)内に無色の想いを有する者が、外に、黄色く、黄の色を有し、黄色く見え、黄色く輝く色を見る。たとえばカルニカーラの花、あるいは、ペナレス産の染め抜かれた衣が、黄色く、黄の色を有し、黄色く見え、黄色く輝くのを〔見る〕ように、内に無色の想いを有する者が、外に、黄色く、黄の色を有し、黄色く見え、黄色く輝く色を見る。。これが第六の勝処である。

(7)内に無色の想いを有する者が、外に、赤く、赤い色を有し、赤く見え、赤く輝く色を見る。たとえばバンドウジーヴァカの花、あるいは、ペナレス産の染め抜かれた衣が、赤く、赤い色を有し、赤く見え、赤く輝くのを〔見る〕ように、内に無色の想いを有する者が、外に、赤く、赤い色を有し、赤く見え、赤く輝く色を見る。これが第七の勝処である。

(8)内に無色の想いを有する者が、外に、白く、白い色を有し、白く見え、白く輝く色を見る。たとえば明けの明星、あるいは、ペナレス産の染め抜かれた衣が、白く、白い色を有し、白く見え、白く輝くのを〔見る〕ように、内に無色の想いを有する者が、外に、白く、白い色を有し、白く見え、白く輝く色

を見る。これが第八の勝処である。

【訳註】(1) 定品第35頌；櫻部建『俱舍論』大蔵出版 p.369以下参照。

【対応資料】AN viii,65 (vol.iv, pp.305-306)；Valentina Stache-Rosen ed. Saṅgītisūtra, viii, 10, pp. 197-198；『阿毘達磨集異門足論』19(大26, 4 45bc)；Yaśomitra, p. 690, l. 22-p. 691, l. 11；Mahāvīyutpatti, 1520-1527.

[1029] AKBh18, 4/Tu28b6/Ju26a2/櫻部p.188.

【和訳】「空無辺^{註1}処等の他の四〔無色^{註1}処〕は」とは。

舍衛國にゆかりがある。

比丘たちよ、処には四つがある。〔四つとは何何か。〕(1)空無辺処、(2)識無辺処、(3)無所有処、(4)非想非非想処である。

これらの処〔について〕は、すぐあと、二番目の経の一部分の解説において見るべきである。

【訳註】(1)「他の」は本文にない。

【対応資料】未比定。

[1030] AKBh18, 5/Tu28b8/Ju26a4/櫻部p.188.

【和訳】「五解脱^{註1}処」とは。

舍衛國にゆかりがある。

比丘よ、解脱^{註1}処には五つがある。いかなる五つか。(29 a)

(1)比丘よ、この世で師、あるいは、いずれかの智者で、師に相應しい、梵行〔を同じくする〕者が法を説く〔とせよ〕。そ〔の行者〕に、師、あるいは、いずれかの智者で、師に相應しい、梵行〔を同じくする〕者が法を説くに従って、〔その行者は〕そのもろもろの法に対して、意味を知り、法を知る者となる。その、意味を知り、法を知る者には喜悅^{註3}(prāmodya)が生ずる。喜悅したかれには喜^{註2}(prīti)が生ずる。意に喜が生じた〔その行者〕にとっては、身体が輕快となる。身体が輕快となった者は樂(sukha)を感受する。樂を感受する者にとっては、〔心が〕統一する。〔心が〕統一した者は、あるがまま(如実)に知り、あるがままに見る。あるがままに知り、あるがままに見る者は、厭離する。

厭離した者は離貪する。離貪した者は解脱する。これが第一の解脱処である。そこに〔立つ〕比丘、あるいは比丘尼にとって、不安定だった注意力(念)は安定し、統一していなかった心は統一し、尽きていなかった漏は尽きる。〔そしてかれは、それまでに〕到達したことのなかった、無上の安樂(yoga-kṣema)たる、涅槃に到達する。

(2)さらにまた比丘よ、師、あるいは、いずれかの智者で、師に相應しい、梵行〔を同じくする〕者が法を説かなくとも、〔行者が〕聞いた通り、示された通り、得た^{注4}〔通りの〕もろもろの法を、大音声をもって唱える〔とせよ〕。〔その行者が〕その、聞いた通り、示された通り、得た通り^{注5}〔のもろもろの法〕を、大音声を以て唱えるに従って、〔その行者は、〕その、もろもろの法に対して、意味を知り、そして法を知るものとなる。その、意味を知り、そして法を知る者にとっては、喜悅が生ずる。喜悅したかれには喜びが生ずる。乃至、離貪し、解脱する。これが第二の解脱処である。そこに〔立つ〕その比丘、あるいは比丘尼にとって、不安定だった念は安定し、統一していなかった心は統一し、尽きていなかった漏は尽きる。〔そしてかれは、〕それまでに到達したことのなかった、無上の安樂たる、涅槃に到達する。

(3)さらにまた比丘よ、師あるいは、いずれかの智者で、師に相應しい、梵行〔を同じくする〕者が、法を説かず、また〔当の行者が、〕聞いた通り、示された通り、得た通りのもろもろの法を、大音声を以て唱えもしないが、聞いた通り、示された通り、得た通りのもろもろの法を、他のひとびとのために詳しく説き明す〔とせよ〕。〔かれが、〕聞いた通り、示された通り、得た通りのもろもろの法を、他のひとびとのために詳しく説き明すに従って、かれはそのもろもろの法に対して、意味を知り、法を知る者となる。その、意味を知り、法を知る者には、喜悅が生じ、乃至、離貪し、解脱する。これが第三の解脱処である。そこに立つ比丘、あるいは比丘尼にとって、不安定だった念は安定し、統一していなかった心は統一し、尽きていなかった漏は尽きる。〔そしてかれは、それまでに〕到達したことのなかった、無上の安樂たる、涅槃に到達する。

(4)さらにまた比丘よ、師あるいは、いずれかの智者で、師に相應しい、梵行〔を同じくする〕者が、法を説かず、また〔当の行者が、〕聞いた通り、示

された通り、得た通りのもろもろの法を、大音声^{注8}を以て唱えず、聞いた通り、示された通り、得た通りのもろもろの法を、他のひとびとのために詳しく説き明すこともないが、聞いた通り、示された通り、得た通りのもろもろの法を、独り遠離して考察し、吟味し、精察する〔とせよ〕。〔かれが、〕聞いた通り、示された通り、得た通りのもろもろの法を、独り遠離して考察し、吟味し、精察するに従って、かれはそのもろもろの法に対して、意味を知り、法を知る者^{注9}となる。その、意味を知り、法を知る者には喜悦が生じ、乃至、離貪し、解脱する。これが第四の解脱処である。そこに立つ比丘、あるいは比丘尼にとって、不安定だった念は安定し、乃至、〔それまでに〕到達したことなかった、無上の安楽たる、涅槃に到達する。

(5)さらにまた比丘よ、師あるいは、いずれかの智者で、師に相応しい、梵行〔を同じくする〕者が、法を説かず、また〔当の行者が、〕聞いた通り、示された通り、得た通りのもろもろの法を、大音声^{注8}を以て唱えず、聞いた通り、示された通り、得た通りのもろもろの法を、〔他のひとびとのために詳しく説き明すこともなく、聞いた通り、示された通り、得た通りのもろもろの法を、〕独り遠離して考察し、吟味し、精察することもないが、〔その行者が、〕いずれかの、三昧の善因を、充分に、〔正しく、〕よく把握し、よく心を向け、よく修し、よく分別する〔とせよ〕。かれが、いずれかの、三昧の善因を、充分に、〔正しく、〕よく把握し、よく心を向け、よく修し、よく分別するに従って、かれはそのもろもろの法に対して、意味を知り、法を知る者となる。その、意味を知り、法を知る者には喜悦が生じ、乃至、離貪し、解脱する。これが第五の解脱処である。そこに立つ比丘、あるいは比丘尼にとって、不安定だった念は安定し、乃至、無上の安楽たる涅槃^{注11}に到達する。

【訳註】(1)対応資料により原文「比丘たちよ」を改める。(2)直訳「意味を知るかれには法を知る喜びが生ずる(!)」。対応資料によって改める。(3)原文では初めにprīti(喜)、次にprāmodya(玄奘訳「欣」)となっているが、諸資料では順序が逆なので改める。(4)原文:ji-ltar-mthong-ba=*yathô-padr̥ṣṭa? 本来(称友疏にあるように)yathôpadiṣṭaと「訳」すべきyathôpadiṭṭ-haをサンスクリット化した人が誤って-padr̥ṣṭaとしたものか。(5) rtogs-pa

(理解された)。これを含む三語はひとまず称友梵文 *yathā-sruta*, *yathôpadiṣṭa*, *yathā-paryavāpta* に合致した訳語をもって和訳することとする。(6) *yangdag-par-rig-pa-dang!* (7) *ji-ltar-thos-pa-dang-ji-ltar-rtogs-pa-dang-khon-du-chud-pa'i!* 註(5)参照。(8)「独り遠離して」は称友疏に欠く。(9) 原文では「法を知り、意味を知る」と逆転している。(10) 称友疏では *sujuṣṭam* が付加される。(11) 原文では「無上の安楽」「涅槃」の位置が逆転している。

【対応資料】Valentina Stache-Rosen ed. *Saṅgitisūtra*, v, 19, pp. 149-151; 『阿毘達磨集異門足論』14(大26, 424c); 安慧俱舍論実義疏 To99a2-101a1. 本庄「シャマタデーヴァの伝える阿含資料補遺—根品(1) [2001] - [2048]—」『神戸女子大学文学部紀要』第32巻, 1998, [2004] 註(1)参照。

[1032] AKBh18, 7/Tu31b1/Ju28b2/櫻部p.188

【和訳】「同様に、『多界経』において〔も〕」とは。

舍衛國にゆかりがある。

さて、同志アーナンダが、ひとり密かに禅思 (*pratisaṃmayana*) していると、〔その〕心中に次のような疑念 (*cetaḥ-parivitarka*) が生じた。「凡そ、生じようとする恐れというものは、すべて愚者に〔のみ〕生ずるのであって、賢者にはない〔のではないか〕。凡そ、生ずる害、損害、被害というものは、愚者に〔のみ〕生ずるのであって、賢者にはない〔のではないか〕」と。そこで同志アーナンダは密かなる禅思から覚めて、世尊のもとに近づいた。近づいて、世尊の両足に頂礼し、一隅に坐した。一隅に坐して、同志アーナンダは世尊に次のように言った。

— 大徳よ、このあたりで私がひとり密かに禅思しておりますと、心中にこのような疑念が生じてまいりました。「凡そ、生じようとする恐れというものは、すべて愚者に〔のみ〕生ずるのであって、賢者にはない〔のではないか〕。凡そ、生ずる害、損害、被害というものは、愚者に〔のみ〕生ずるのであって、賢者にはない〔のではないか〕」と。

— アーナンダよ、それはその通り。それはその通りである。凡そ、生じようとする恐れというものは、すべて愚者に〔のみ〕生ずるのであって、賢者

にではない。凡そ、生ずる害、損害、被害というものは、愚者に〔のみ〕生ずるのであって、賢者にではない。(32a)アーナンダよ、たとえば乾いた葦、あるいは草でできた多くの家屋を火で焼けば、見る間に火に焼けてしまうが、それほど〔当然にも〕、凡そ、生じようとする恐れというものは、すべて愚者に〔のみ〕生ずるのであって、賢者にではない。凡そ、生ずる害、損害、被害というものは、愚者に〔のみ〕生ずるのであって、賢者にではない。

過去時において〔も〕、凡そ、生じようとする恐れというものは、すべて愚者に〔のみ〕生じたのであって、賢者にではない。凡そ、生じようとする害、損害、被害というものは、愚者に〔のみ〕生じたのであって、賢者にではない。

未来時においても、凡そ、生じようとする恐れというものは、すべて愚者に〔のみ〕生ずるのであって、賢者にではない。凡そ、生じようとする害、損害、被害というものは、愚者に〔のみ〕生ずるのであって、賢者にではない。アーナンダよ、過去、未来、現在時において愚者は恐れを抱き、賢者はそうではない。愚者は害され、賢者はそうではない。愚者は損害を受け、賢者はそうではない。愚者は被害を被り、賢者はそうではない。アーナンダよ、愚者はこのような害、損害、被害を被るものであると認められ、賢者はそうではない。アーナンダよ、だから愚者の特質(法)と賢者の特質とを知るがよい。愚者と賢者との特質を知り、愚者の特質を捨てよ。(32b)賢者の特質に入り、学習せよ。

——大徳よ、〔ひととは〕どのようにして「愚者」「愚者」と呼ばれることとなる(saṃkhyāṃ gacchati)のですか。

——アーナンダよ、蘊に通じておらず、界、処、縁起、処(sthāna, 可能性)・非処(āsthāna)に通じていないというこれだけのことによって〔ひととは〕「愚者」「愚者」と呼ばれることとなる。

——大徳よ、それだけのことで「愚者」「愚者」と呼ばれることとなる、としますと、大徳よ、どれだけのことによって「賢者」「賢者」と呼ばれることとなるのですか。

——アーナンダよ、〔愚者とは逆に、〕蘊に通じ、界、処、縁起、処・非処に通じたそのひとが「賢者」という名を得るのである。

——大徳よ、どれだけのことによって、界に通じたひととなるのですか。

——アーナンダよ、(1)十八界に通じ、〔それを〕知り、見るのである。
〔すなわち〕あるがままの眼界、色界、眼識界、耳界、声界、耳識界、鼻界、
香界、鼻識界、舌界、味界、舌識界、身界、所触界、身識界、意界、法界、意
識界である。これら十八界を、正しく、如実に知り、見るのである。

(2)さらに、六界を正しく、如実に知り、見るのである。〔すなわち〕地界、
水界、火界、風界、空界、識界〔という〕これらの界を、正しく、(33a)如実
に知り、見るのである。

(3)さらに、六界を正しく、如実に知り、見るのである。〔すなわち〕欲界、
害(vihimsā)界、瞋恚(vyāpāda)界、離脱界、害界(!)、無害界^{註3}を知り、見る
のである。これらの六を〔正しく、〕如実に知り、見るのである。

(4)さらに、六界を正しく、如実に知り、見るのである。〔すなわち〕楽界、
苦界、喜界、憂界、捨界、無明界である。これら六を、正しく、如実に知り、
見るのである。

(5)さらに、四界を正しく、如実に知り、見るのである。〔すなわち〕受界、
想界、行界、識界である。これら四を〔正しく、〕如実に知り、見るのである。

(6)さらに、三界を正しく、如実に知り、見るのである。〔すなわち〕欲界、
色界、無色界である。これら三を、正しく、如実に知り、見るのである。

(7)さらに、三界を正しく、如実に知り、見るのである。〔すなわち〕色界、
無色界、滅界である。これら三を正しく、如実に知り、見るのである。

(8)さらに、三界を正しく、如実に知り、見るのである。〔すなわち〕過去
界、未来界、現在界である。これら三を正しく、如実に知り、見るのである。

(9)さらに、三界を正しく、如実に知り、見るのである。〔すなわち〕劣界、
中界、妙界である。これら三を(33b)、正しく、如実に知り、見るのである。

(10)さらに、三界を正しく、如実に知り、見るのである。〔すなわち〕善界、
不善界、無記界である。これら三を正しく、如実に知り、見るのである。

(11)さらに、三界を正しく、如実に知り、見るのである。〔すなわち〕学界、
無学界、非学非無学界である。これら三を正しく、如実に知り、見るのである。

(12)さらに、二界を正しく、如実に知り、見るのである。〔すなわち〕有漏
界、無漏界である。これら二を正しく、如実に知り、見るのである。

(13)さらに、二界を正しく、如実に知り、見るのである。〔すなわち〕有為界、無為界を知り、見るのである。

以上によって界に通じたひととなるのである。

——大徳よ、それだけのことによって界に通じたひととなる、としますと、大徳よ、どれだけのことによって処に通じたものとなるのですか。

——アーナンダよ、十二処を正しく、如実に知見すること〔によって〕である。^{注4}眼処、色処、耳処、声処、鼻処、香処、舌処、味処、身処、所触処、意処、法処〔を〕である。これら十二処を正しく、如実に知見する、これだけのことによって処に通じたものとなるのである。

——大徳よ、それだけのことによって処に通じたものとなる、としますと、大徳よ、どれだけのことによって縁(34a)起に通じたものとなるのですか。

——アーナンダよ、十二支縁起を、順・逆に、如実に知り、見る〔場合〕である。〔順に、とは〕いわく、これがあればかれが生じる、これが生ずることによってかれが生ずる、すなわち、無明の縁によって行が、行の縁によって識が、識の縁によって名色が、名色の縁によって六処が、六処の縁によって触が、触の縁によって受が、受の縁によって愛が、愛の縁によって取が、取の縁によって有が、有の縁によって生が、生の縁によって老、病、死、悲しみ、悲嘆、苦、憂、絶望が生ずる。〔こうして〕この大いなる苦の集まりのみが生ずる〔、とである〕。〔逆に、とは〕いわく、これがなければかれは生じない、これが滅することによってかれが滅する。〔すなわち、〕無明の滅によって行が滅する。行の滅によって識が、識の滅によって名色が、名色の滅によって六処が、六処の滅によって触が、触の滅によって受が、受の滅によって愛が、愛の滅によって取が、取の滅によって有が、有の滅によって生が、生の滅によって老、病、死、悲しみ、悲嘆、苦、憂、絶望が滅する。こうして、この大いなる苦の集まりのみが滅する〔、とである〕。アーナンダよ、それだけのことによって縁起に通じたものとなる。

——大徳よ、そのことで縁起に通じたものとなる、としますと、大徳よ、(34b)どれだけのことによって処・非処に通じたものとなるのですか。

——アーナンダよ、非処を非処と、処を処と如実に知る〔場合〕である。

(1)アーナンダよ、あり得ず、起り得ない。身悪行、意、^{注5}語悪行の異熟が、好ましく、望ましく、愛すべく、心に叶うものとして成就することは、これはあり得ず、起り得ない。〔その逆は当然であり、道理である。〕

(2)身善行、意、語善行の異熟が、好ましくなく、望ましくなく、愛すべきでなく、心に叶わぬものとして成就すること、これはあり得ず、起り得ない。身善行、語、意善行の異熟が、好ましく、望ましく、愛すべく、心に叶うものとして成就すること、これは当然であり、道理である。

(3)あり得ず、起り得ない。身悪行、語、意悪行を行ずるものが、その因、その縁によって、身体が減び、死した後、天界や人間界に生れること、これはあり得ず、起り得ない。当然であり、道理である。身悪行を行じ、語、意悪行を行ずるものが、その因、その縁によって、身体が減び、死した後、〔悪所、〕悪趣、悪処、地獄に生れること、これは当然であり、道理である。

(4)あり得ず、起り得ない。身悪行を行じ、語、意悪行を行ずるものが、その因、その縁によって、身体が減び、死した後、〔悪所、〕悪趣、悪処、地獄に生れること、これはあり得ず、起り得ない。当然であり、道理である。身善行を行じ、語、意悪行を行ずるものが、その因、その縁によって、身体が減び、死した後、天界や人間界に生れること。これは当然であり、道理である。

(5)あり得ず、起り得ない。前後にずれることなく、同一の世界に二人の転輪聖王が出現すること、これはあり得ない。一人〔の転輪聖王〕が出現すること、これはあり得る。

(6)あり得ず、起り得ない。前後にずれることなく、同一の世界に、二人の如来、阿羅漢、正等覚者が出現すること、これはあり得ない。一人が出現することはあり得る。

(7)あり得ず、起り得ない。女が転輪聖王となること、これはあり得ない。男がなること、これはあり得る。

(8)あり得ず、起り得ない。女が^{注6}四天王、(9)^{注7}帝釈天、(10)梵天となり、(11)独覚の覚りをなし、(12)無上正等覚者をなすこと、これはあり得ない。男がなすこと、これはあり得る。

(13)あり得ず、起り得ない。〔聖〕見を具えた〔聖者〕が故意に母を殺すこ

と、これはあり得ない。凡夫ならあり得る。

(14)あり得ず、起り得ない。〔聖〕見を具えた〔聖者〕が故意に父を殺すこと、これはあり得ない。凡夫ならあり得る。

(15)阿羅漢を殺すこと、(16)教団(僧伽)を分裂させること、(17)如来の御身より悪心をもって出血させること、これはあり得ない。凡夫ならあり得る。

(18)あり得ず、起り得ない。〔聖〕見を具えた〔聖者〕が、故意に畜生の衆生を殺し、(19)故意に学処を犯し、(20)学処から退失し、(21)こ〔の教え〕より外道の福田に追隨し、(22)こ〔の教え〕より外道の福田を信じ、(23)「これら沙門、婆羅門は知るべきを知り、見るべきを見た」と、〔外道の〕沙門、婆羅門に対面してこれを〔仰ぎ〕見、対面して省察し、(24)吉祥、吉兆にたいして信を抱き、(25)第八の生存を成就すること、これはあり得ない。凡夫ならばあり得る。

(26)あり得ず、起り得ない。心を汚し、慧を衰退させ、涅槃獲得の障害となる五蓋を捨てることなく四念住に心を安住させ、行ずること、これはあり得ない。心を汚し、慧を衰退させ、涅槃獲得の障害となる五蓋を捨てて、四念住に心を安住させつつ時を過ごすこと、これは道理である。

(27)あり得ず、起り得ない。心を汚し、慧を衰退させ、涅槃獲得の障害となる五蓋を捨てることなく四念住に心を安住させつつ時を過し、七覚支を修すること、これはあり得ない。心を汚し、慧を衰退させ、涅槃獲得の障害となる五蓋(36 a)を捨て、四念住に心を安住させつつ時を過し、七覚支を修すること、これは道理である。

(28)あり得ず、起り得ない。心を汚し、慧を衰退させ、涅槃獲得の障害となる五蓋を捨てず、四念住に心を安住させず、行ぜず、七覚支を修することなく苦を終らせること、これはあり得ない。心を汚し、慧を衰退させ、涅槃獲得の障害となる五蓋を捨て、四念住に心を安住させ、行じ、七覚支を修して苦を終らせること、これは道理である。

(29)あり得ず、起り得ない。心を汚し、慧を衰退させ、涅槃獲得の障害となる五蓋を捨てず、四念住に心を安住させず、行ぜず、七覚支を修することなく独覚のさとりを直証すること、これはあり得ない。当然であ〔り、道理であ〕

る。心を汚し、慧を衰退させ、涅槃獲得の障害となる五蓋を捨て、四念住に心を安住させ、行じ、七覚支を修して独覚のさとりを直証すること、これは道理である。

(30)あり得ず、起り得ない。心を汚し、慧を衰退させ、涅槃獲得の障害となる五蓋を捨てず、四念住に心を安住させず、行ぜず、七覚支を修することなく無上正等菩提を覚ること、これはあり得ない。これは当然であり、道理である。心を汚し、慧を衰退させ、涅槃獲得の障害となる五蓋を捨て、四念住に心を安住させ、行じ、七覚支を修して無上正等菩提を覚ること、これは道理である。〔このように如実に知る場合である。〕アーナンダよ、これだけのことによって処・非処に通じたものとなる。

——大徳よ、それだけのことによって処・非処に通じたものとなる、としますと、この法門の名は何ですか。どのように受持すべきですか。

——アーナンダよ、ではこの法門の名は「四転(*catuḥ-parivarta)とも受持せよ。「法の鏡」と〔も〕受持せよ。「甘露の太鼓」と〔も〕受持せよ。「多界経」と〔も〕受持せよ。

ゆえに、多界経にこのように説かれるのである。中間の摂偈に〔いう〕。

界は十八、四、地、欲、受、楽、
欲、色、過去、妙、善界、
学、無学、有漏、無漏、
有為、無為となして、纏めて示される。^{註12}

【訳注】(1)? mthong-bar. (2)他の資料の読みはkiyatā(どれだけ〔の条件〕によって)を前提としている。(3)漢訳『法蘊論』、蔵訳別行本、称友所引梵本では「欲界、瞋恚(vyāpāda)界、害(vihimsā)界、超脱(naiṣkramya)界、無瞋恚界の順である。ただし『法蘊論』では「超脱」が「無欲」となっている。nekkhammaのような語形からはnaiṣkramyaとともにnaiṣkāmya(<niṣ+kāma)への「還梵」が可能だからであろう。また『山口益博士還暦記念印度学佛教学論叢』1956所収、櫻部建「シャマタデーワの依用する中阿含について」に示される『多界経』類の表参照。(4)直訳:「知見することに通じるのである」。(5)順序が異例である。(6)蔵訳別行本、『法蘊論』に「四天王」を

欠く。(7)蔵訳別行本、『法蘊論』、パーリには「魔」を加える。(8)蔵訳別行本、『法蘊論』では「有情の命を断ずる」。(9)?rtog-pa.(10)dpyod-pa!蔵訳別行本ではgnas-pa(時を過す)。(11)rtsi-lngaをrtsi-rngaと訂正する。(12)最後にbstan(Pek.brtan)-yod-'dir-ni-gzugs-gcig-puとあるが、理解しにくい。

【対応資料】中阿含47, 181「多界經」(大1, 723 a-724 c); 「四品法門經」(大17, 712b-714a); 『法蘊論』10「多界品」(大26, 501b-502c); khamsmang-po'i-mdo 0tani no.963; Tohoku no. 297; Yasomitra, 55, 17-56, 11; MN 115 Bahudhātukasuttaṃ (vol.iii, 61-67).

付記 平成10年度、佛教大学において研修員としてお世話になった記念に拙稿を発表させて頂くことができました。関係各位に厚くお礼申し上げます。

